
指さきから出発する

アヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指さきから出発する

【Nコード】

N6485Z

【作者名】

アヤ

【あらすじ】

なんでもない日常です

なんと呼ぶのだろう。

「ねーねーアオイちゃん」

「相川って呼んで」

「やだ」

「なに？」

帰り支度をはじめるアオイちゃんの傍らに立ってそんな会話をするために、教科書やらノートやらを、あたしはいつも投げ込むように鞆に詰める。

あたしとアオイちゃんは隣席だけれど、油断していると、彼は誰とも目を合わそうとしないでさっさと帰ってしまう。だからあたしの鞆のなかはいつもぐちゃぐちゃだ。でも、最近はそれが素敵なもののように見えてきた。

「一緒に帰ろ、アオイちゃん」

アオイちゃんは嫌だと言わない。

目を合わせて話そうとしても、彼はかたくなに視線を逸らして薄い唇をぎゅうつとひき結んでいる。いつも嫌そうだけど、いやだと

言わないから、あたしは一緒に帰ろうと言う。

アオイちゃんは家が遠いのに自転車通学で、片道二時間もかけて学校に来る。

電車を使えばいいじゃない。

あたしが前にそう言ったら、アオイちゃんは少し困った顔をしただけだった。

電車通学にしてくれたら、電車の中もいっしょなのになあ、と思う。でも彼はそうしないので、学校から駅までの短い距離をいっしょに歩く。一緒に歩きながら、少し背の高いアオイちゃんの横顔を見る。

一重ですうつと細い彼の右眼だ。左目は二重、右よりもすこしおおきいから、彼の眼はバランスが悪い。その両目がそろってあたしを見ると、あたしは声がしばらく出せなくなる。

「猫だよ、アオイちゃん」

「うん」

「かわいいねえ。アオイちゃんは猫好き？」

「ふつつ」

「ふうん」

ふつつつてなあに。

アオイちゃんの考えていることはちつとも解らないし、あたしの考えていることはちつともアオイちゃんに伝わっていないだろう。

いま目の前を横切って行った茶トラの猫はかわいかったね、って言いあうくらい、許されてもいいんじゃないかないら。なんでこんなにつれないのこの人、ねえ。

誰かがあたしたちを見ていたら、そう言いたい。

あたしが黙ってしまうと、アオイちゃんの押す自転車のどこかが、笑うみたいにからから鳴る。

あたしは骸骨のお化けが笑う音みたいで嫌いだったけれど、自転

車をいつまでたってもなおさないアオイちゃんは、別に気にしていないんだろう。

からから。からから。

なんだか腹が立ってくる。

のろのろ歩きのアオイちゃんとあたしの横を、同じ制服の女の子が二人で抜かしていった。

桜の花びらが、ひらひら、その子たちを追いかけて飛んでいる。

もそもそと陰気に歩いているだろうあたしたちなんて居ないみたいに、ふわふわとじゃれあいながら彼女たちは、もう随分と近かった改札の向こうに消えていく。電車の発車したらしい音が、彼女たちの笑い声の合間に割り込む。

ああ。改札がもうすぐそこで嫌だ。

「また明日ね、アオイちゃん」

「うん」

でもあたしは笑って手を振る。

アオイちゃんに乗った自転車はすぐにスピードを出して、すいすいと走っていく。見えなくなってしまうまで手をふり続ける自分が馬鹿みたいだと思った。

すきあいしているとおしい。

うーん。

どれも違う気がして、あたしはまいにちお風呂で悩む。

アオイちゃんには、あたしの思っていることがちっとも伝わらない。しょうがないから、あきらめて言葉にしてみようかと思うのだけれども、口に出したら全部、ぼろぼろ零れてぐしゃぐしゃ溶けて、

何も残らない気がする。それって台無し。

あたしは悩む。

アオイちゃんの古い自転車が鳴る音がする。

からからからから。

たとえば彼と同じ名前だったら良かったなあ、と思う。

たとえばあたしも男だったら良かったなあ。たとえば彼みたいに、何かに脅えるように電車が嫌いと言えたらよかったなあ。

たとえばたとえばたえ。からからからから。

セックスしたいなあ、とあたしは思う。

同じ人間で、おなじ教室に居て、ほとんど毎日いつしよに帰っているのに、お互いになにひとつ伝わらないなんてそんなことあるはずがない。

好きとか愛してるとかそれじゃあない気がする。

これを見んなは、何と呼んでいるのか。あたしだけ知らないのだろうか。

最近ブラジャーがきつくなってきたおっぱいのうえにてのひらを乗せて、「あー」声を出してみる。お湯に半分つかったあたしの唇の隙間から、ぽこぽここと泡がこぼれて、すぐに消えた。

数学の授業中に、セックスをしよう、とノートの切れ端に書いた。そうしてそれを指でぎざぎざに千切って、隣の席のアオイちゃんの机に向かって放り投げた。

猫が寝る前のときみたいな顔をしていた彼は、あたしのたった8文字の手紙もどきを読むと、しばらく動きを止めた。

へんな顔をしてくれるのをちょっと期待していたのだけれど、アオイちゃんは何事もなかったみたいにまた黒板に視線を戻した。授業中、あたしのことは一度も見なかった。

「ねーねーアオイちゃん」

「相川って呼んで」

「やだ」

「なに？」

「一緒に帰る」

帰り道に猫を見たら、また、かわいいねって言おうと決めていたのに、今日は見なかった。ときどき何処からか飛ばされてくる桜の花びらはもう飽きていて、口に出さなくてもいいかなあと思う。

アオイちゃんが押す自転車の音が嫌だ。あたしは何か言おう言おうと思っているのだけれども、かさかさした唇の間からは、息が出ない。駅が近づいてしまう。からからからから。

先に声を出したのはアオイちゃん、あたしは、え、と間抜けな声を出して横を見た。

「単細胞生物」

「うん？」

「単細胞生物。理科でならったやつ。ほら、ミカヅキモとかミドリムシとか」

「うん」

「俺、ああいうのだったらいいのに、って思ったよ。今日」

「今日」

「伊藤が、数学の授業中に投げてきた紙切れを読んだとき」

「ああ」

セックスをしない、ひとりで淡々と増える、ひとりで増えるからほかのひとはいらなくて、ひとに近付かない、相手を傷つけないし傷つかない、不用意に肌のあたたかさに感動したりしない。

そんなにせつなくて心細い生き物はいやだなあとあたしは思う。

「アオイちゃん、手を繋いで良い？」

「うん」

良いと言ったのに、彼は手をちつともこちらに伸ばさない。

仕方がないから、あたしは手を伸ばして自転車のハンドルに置かれた彼の手の甲に重ねた。擦り傷が少しあって、すこしだけ固い皮膚だった。あたしのてのひらは、ふにやふにやしていて頼りない。

少しも似ていない手だ。あたしと、アオイちゃんの。

背中がぞくぞくするくらい、違う。そのぞくぞくの正体がよくわからないまま、あたしの視界ではいろんな輪郭がゆらゆらとしはじめる。泣きそうだ。どうしてだろう。

アオイちゃん、あたしが呼ぶと、彼はこっちを見た。

「あたしの指さきから出発して」

「指先？」

「そう。それで、爪をとおって指をまっすぐすると落ちる。そこからてのひら」

「うん」

「てのひらから、まだまだぐんぐん伸びて血管をまたいで腕を通ってそうして貴方の胸のところまでゆくのです」

「胸」

「わかる？」

「さっぱり、何も」

ああ。

「心って心臓の位置にあるんじゃないのかなあ、アオイちゃん」

「ちがうと思う」

「じゃあ手にある」

「それも違うと思う」

なにひとつお互いにわからないままだ。

あたしの視界はやっぱりゆらゆらして、色んな輪郭はぼやけてあつちこつち溶けあつてゆきそう。

くすぐられるようにそわそわするあたしの身体は、ずっと笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6485z/>

指さきから出発する

2011年12月21日21時48分発行